



あることりの夫婦に子どもができました。  
おかあさんは子どもがとてもかわいくて、  
二人ですつといられるように  
すてきなねどこをつくりました。  
子どももすつかりそれを気に入って、  
とても仲良く暮らしはじめました。

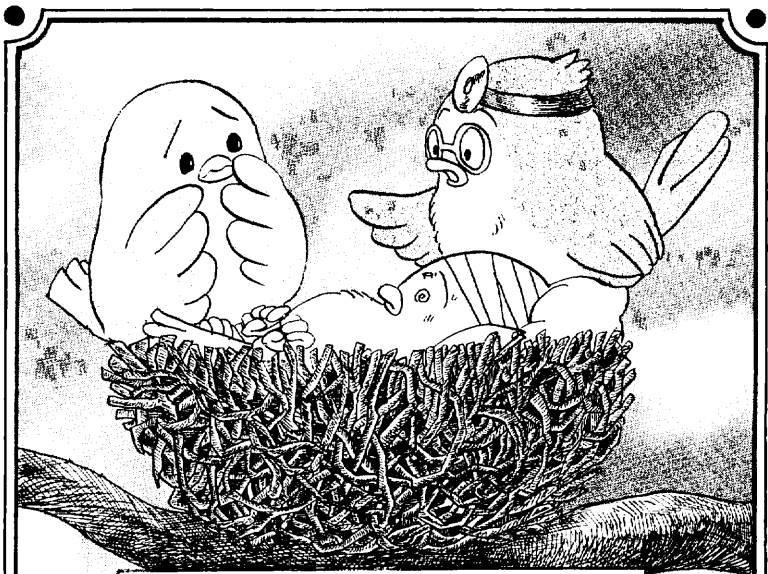
それから何年もたちました。  
このごろ子どもの様子がなんだか  
変です。おかあさんはとつても心配。  
おとうさんはエサを探しに行ったきり。  
子どもも自分がどうして具合が悪い  
のかわからないので不安です。  
おかあさんは少しでも子どもが  
ぐっすりねむれるように、木の枝一本  
にすらこだわってせつせとねどこを  
つくろいます。  
でも、そうしておかあさんがねっしん  
なほど、なんだか子どもは苦しそう。  
「いったいどうゆうことなのかしら？  
これまではあんなにうまくやってきた  
のに」





おかあさんは気がつかないのです。子どもはもうすっかり大きくなっていて、ひとつのねどこではいっぱいなことに。子どもはいまにもはみだしそう。そうです。子どもはもう自分のねどこをいっふうに自分で作れるはずなのです。でも子どももねどこはおかあさんが作るものだと生まれたときから思っているのです。そのことを知りません。






子どもはねどこがきゆうくつなことに  
うすうす気がついていましたが、  
ねどこからおつこちた今でもなんだか  
まだきゆうくつなのでふしぎでした。  
お医者はいいました。  
「あなたたちのねどこは二人でいるには  
もうせますぎるんですよ。新しいねどこ  
が必要です。」  
おかあさんははっとしました。そして  
子どもをもういちどよく見てやっど、  
もう自分と変わらない大きさだとい  
うことに気がついたのです。  
「そうだったのーそれならもつと  
ねどこをおおきくしなくちゃあ。」

そこでお医者さん、  
「そうではないのです、おかあさん。  
つまり私が言いたいのはねとこがふたつ  
いるってことなんですよ。」  
こんとは子どもがはっとしました。いま  
までおかあさんといえるのがあたりまえ  
すぎて、そんな考えがあるなんて思い  
つきもしなかったからです。





いま、子どもは自分のねどこを作っています。  
はじめてのことなので、みためはぶかっこうなの  
ですが、それでもはじめて自分で何かをしたこと  
とても満足しています。ともだちもできました。  
今まで知らなかった世界が子どもをゆかいにさせて  
くれます。ときおり、おかあさんはちよっぴり  
心配そうに子どものあたらしいねどこのまわりを  
飛んだりしますが、もう世話をやいたり、くちを  
出したりしません。そのほうがいいということが  
なんとなくわかったからです。  
青いそらは今日もなごやか。ことりたちが  
たのしそうにとびまわっています。

THE  
BIRDS